

同志社大学

2013年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2014年 2月5日提出

所 属	職 名	氏 名
グローバル・コミュニケーション学部	教授	伊勢 晃
研 究 題 目	20世紀初頭のフランス文芸思潮におけるモダニズムの形成と展開に関する実証的研究	
研 究 成 果 の 概 要	<p>前年度はルイズ・ラランヌという女流作家になりすましたアポリネールが、当時の女流作家についてどのように考え、いかに批評したかということをも、<i>Les Marges</i> 誌の1909年1月号から3月号までの範囲で検討し、ルイズ・ラランヌの女流作家の作品に対する批評が、謙虚さを装いながらも、辛辣で皮肉に満ち、感情的で主観的であるという特徴を確認した。今年度は前年度に十分には検討できなかった、ルイズ・ラランヌ名での批評だけではなく、その他の女流文学批評に対象を拡張し、「vrai」と「faux」という観点を導入し、当時のアポリネールの創作活動を視野に入れながら、アポリネールの女流文学批評の特徴を明確にし、彼の文学批評全体の中での位置づけを検証することを目的とした。アポリネールの女流作家に関する批評は性差を超えた普遍的なものであり、当時の小説の危機を踏まえた詩人の新しい文学、芸術観に根ざすものであると指摘した。また、ルイズ・ラランヌという架空の女流詩人を登場させることにより、その批評が及ぼす影響が拡大し、新しい「vrai」が更新されていく様子を確認することによって、彼女が「vrai」と「faux」の世界を結ぶ詩人であることを確認した。</p> <p>なおこの研究成果は、雑誌論文として以下の雑誌に発表した。</p> <p>伊勢 晃 「アポリネールの女流文学批評(2) —《vrai》と《faux》の観点からの考察—」『年報フランス研究』47, 関西学院大学フランス学会, 2013, pp.49-59.</p>	